

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第5回

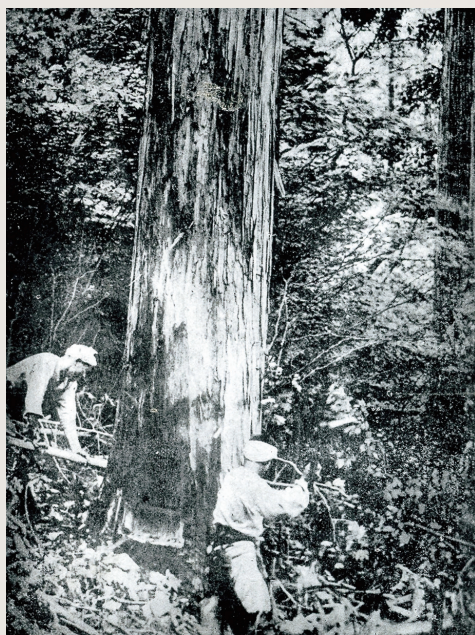
中部森林管理局技術普及課

井上 日呂登いのうえ ひろと

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「斧での伐採」

日本でチェーンソーが本格的に普及するのは昭和三十年代のことですが、それ以前の木の伐採は斧(ヨキ)と鋸(ノコ)を組み合わせて行われていました。江戸時代の木曾では鋸での伐採が禁じられていたとも伝えられています。斧だけを用いた伐採技法



大正九年「神宮御造管材斧入ノ実況」
(現在の東濃森林管理署管内)

は、儀式的な意味合いを持って現代にも伝えられています。

昔は伐木に携わる林業労働者はてま杣と呼ばれる、技術と経験を持った者は斧と鋸を用いて、ほとんど思う方向に倒すことができました。樹種や木の太さにもよりますが、普通の者で一日に十数本、熟練した者で二十本以上伐採することができたと伝えられて



昭和18年頃「伐木の受け口掘り」
(現在の南信森林管理署管内)



昭和30年頃「雪上伐採」
(現在の北信森林管理署管内)

います。杣の賃金は伐採量によって計算されましたので作業効率が稼ぎに直結するのですが、伐木は危険の伴う作業ですので、体調や天候、及び安全のための縁起担ぎには特に気を遣ったようです。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、QRコードを読み込んでください。

